

Külshammer-Olsson-Robinson 予想について

(On the conjecture of Külshammer-Olsson-Robinson)

東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構 土岡俊介 (Shunsuke Tsuchioka)*†

Kavli Institute for the Physics and Mathematics of the Universe, Todai Institutes for Advanced Study

1 はじめに

本稿の目的は、Külshammer-Olsson-Robinson の予想 [KOR, Conjecture 6.4] (以下、KOR 予想と略する) の紹介と、論文 [Tsu] で提案した精密化 [Tsu, Conjecture 6.8]¹の説明である²。精密化は圏論化の文脈に基づいており (本稿 §5)、その説明には [Tsu2] も参考になるだろう。

1.1 記法

以下、 $\mathbb{N} = \mathbb{Z}_{\geq 0}$ で非負整数の集合を、 $\mathbb{N}_+ = \mathbb{Z}_{\geq 1}$ で正整数の集合を表すことにする。

0 の分割を ϕ で表し、 $\emptyset$ は空集合を意味している。分割 $\lambda = (\lambda_1, \lambda_2, \dots)$ について、 $m_k(\lambda) = |\{i \geq 1 \mid \lambda_i = k\}|$ と定義し ($k \in \mathbb{N}_+$)、 $|\lambda| = \sum_{i \geq 1} \lambda_i$ 、 $\ell(\lambda) = \sum_{i \geq 1} m_i(\lambda)$ とする。 $\text{Par}(n)$ は n の分割の集合であり ($n \in \mathbb{N}$)、 $\text{Par} = \bigsqcup_{n \geq 0} \text{Par}(n)$ とする。 $m, n \in \mathbb{N}$ について、 $\text{Par}_m(n) = \{(\lambda_i)_{i=1}^m \in \text{Par}^m \mid \sum_{i=1}^m |\lambda_i| = n\}$ を n の m -多重分割の集合とし、 $u(m, n) = |\text{Par}_m(n)|$ とする (特に $u(0, 0) = 1$ かつ、 $n \in \mathbb{N}_+$ ならば $u(0, n) = 0$ である)。

R を単位的可換環とする。2つの $m \times m$ 行列 $X, Y \in \text{Mat}_m(R)$ がユニモジュラー同値である ($X \equiv_R Y$ と記す) とは、 $X = PYQ$ となる可逆行列 $P, Q \in \text{GL}_m(R)$ が存在することを言う。 R の元を成分に持つ正方行列 X と、 R の元からなる多重集合 S について、 $X \equiv_R \text{diag}(S)$ を $X \equiv_R S$ と略記する。ここで $\text{diag}(S) = (s_{ij})_{i,j \in I}$ は多重集合として $\{s_{ii} \mid i \in I\} = S$ となる対角行列である。

1.2 KOR 予想の背景

定義 1.1. $\mathbb{F}$ を体、 A を有限次元 $\mathbb{F}$ 代数とする。 A のカルタン行列 C_A を

$$([\text{PC}(D) : D'])_{D, D' \in \text{Irr}(\text{Mod}(A))} \in \text{Mat}_{|\text{Irr}(\text{Mod}(A))|}(\mathbb{Z})$$

と定義する。ここで $\text{Mod}(A)$ は有限次元左 A 加群のなすアーベル圏であり、 $D \in \text{Irr}(\text{Mod}(A))$ について $\text{PC}(D)$ はその射影被覆である。

*tshun@kurims.kyoto-u.ac.jp

†The research was supported by Research Fellowships for Young Scientists 23-8363, Japan Society for the Promotion of Science.

¹正確には、「KOR 予想と同値な Hill 予想の精密化」と言うべきである。

²と書くと、[Tsu] は予想が主題と思われるかもしれない。ある意味そうなのだが、この論文の動機は対称群の表現論とは別に、純粋に量子群に関連した問題 [Kas, Problem 2] にも依っている。論文の主定理は、この問題に関連したものであるが、本稿ではこの周辺の話題には触れない。

$A = \overline{\mathbb{F}_p}G$ が標数 $p > 0$ の代数閉体上の有限群 G の群代数の場合、 $\det C_A$ は p の冪であることが知られている [Bra, Theorem 1]。より詳しく以下が知られている。

定理 1.2 ([BrNe, Part III, §16]). G を有限群、 $p \geq 2$ を素数とし、 $g_1, \dots, g_k$ を G の p -正則共役類³ $C_1, \dots, C_k$ の代表元とすると、 $C_{\overline{\mathbb{F}_p}G} \equiv_{\mathbb{Z}} \{ | \text{Syl}_p(C_G(g_i)) | \mid 1 \leq i \leq k \}$ が成り立つ⁴。

KOR 予想は、 G が対称群 $\mathfrak{S}_n$ の場合に、上記定理の“標数 p が素数とは限らない 2 以上の自然数 ℓ ” への一般化を与える。

2 対称群の ℓ -モジュラー表現論

2.1 対称群の通常指標論

良く知られている $\text{Par}(n)$ による $\text{Irr}(\text{Mod}(\mathbb{Q}\mathfrak{S}_n))$ のパラメトライズを復習しよう。この対応では分割 $\lambda \in \text{Par}(n)$ について、対応する既約 $\mathbb{Q}\mathfrak{S}_n$ -加群の指標 χ_λ が、無限変数対称関数環 $\Lambda = \bigoplus_{n \geq 0} \varprojlim_{m \geq 0} \mathbb{Z}[x_1, \dots, x_m]_{\mathfrak{S}_m}$ 中で $\forall \mu \in \text{Par}(n), p_\mu = \sum_{\lambda \in \text{Par}(n)} \chi_\lambda(C_\mu) s_\lambda$ によって特徴付けられるのであった [Mac, I.7]。ここで $p_\mu = \prod_{i=1}^{\ell(\mu)} (\sum_{j \geq 1} x_j^{\mu_i})$ 、 s_λ は Schur 関数 [Mac, I.3] で、 C_μ はそのサイクル型が μ で与えられるような $\mathfrak{S}_n$ の元からなる $\mathfrak{S}_n$ の共役類である。

2.2 一般化されたブロック

定義 2.1 ([KOR, §1]). G を有限群とし、 $\mathcal{C} \subseteq G$ を共役で不変な G の部分集合とする⁵。 $\mathcal{C}(G)$ を G 上の複素数値関数のなす複素ベクトル空間とし、さらに内積を $\langle \alpha, \beta \rangle_{\mathcal{C}} = \frac{1}{|\mathcal{C}|} \sum_{g \in \mathcal{C}} \alpha(g) \overline{\beta(g)}$ と導入する (ここで $\alpha, \beta \in \mathcal{C}(G)$)。

- (a) G の通常指標 ψ と φ は、 $\langle \psi, \varphi \rangle_{\mathcal{C}} \neq 0$ であるとき、*directly $\mathcal{C}$ -linked* である言う (このことを $\psi \approx_{\mathcal{C}} \varphi$ と略記する)。これは明らかに対称的な関係である。
- (b) G の $\mathcal{C}$ -ブロックとは、関係 $\approx_{\mathcal{C}}$ の推移的閉包による G の通常指標の同値類のことである。

$p \geq 2$ を素数とする。定義 2.1 において $G_{p'} := \{g \in G \mid \text{ord}_G(g) \notin p\mathbb{Z}\}$ を G の p -正則元の集合とすると、 $G_{p'}$ -ブロックは通常の p -ブロックであることに注意しよう。

定義 2.2. $\ell \geq 2$ を自然数とする。

- (a) 分割 λ が ℓ -類正則であるとは、 λ のどの部分も ℓ で割り切れない (すなわち $\forall k \geq 1, m_{k\ell}(\lambda) = 0$) ことを言う。 $\text{CRP}_\ell(n)$ によって、 n の ℓ -類正則な分割の集合を表すこととする。
- (b) 対称群 $\mathfrak{S}_n$ の ℓ -ブロックとは、 $\mathcal{C}_\ell := \bigsqcup_{\lambda \in \text{CRP}_\ell(n)} C_\lambda$ -ブロックのことである。

$p \geq 2$ が素数のとき、 $\mathfrak{S}_n$ の p -正則共役類は $\{C_\lambda \mid \lambda \in \text{CRP}_p(n)\}$ で尽くされることはよく知られている。よって $\ell = p \geq 2$ が素数のとき、定義 2.2 における対称群の ℓ -ブロックは、通常モジュラー表現論における p -ブロックの概念と同一である。

以下に引用する論文 [KOR] の主定理は、Brauer と Robinson によって証明された中山予想 [Nak, BrRo] の一般化を与えている。証明は、対称群の ℓ -ウェイトが $w \geq 1$ の ℓ -ブロックと、環積 $(\mathbb{Z}/\ell\mathbb{Z})$

³ $g \in G$ が p -正則であるとは、 $\text{ord}_G(g) \notin p\mathbb{Z}$ となることを言う。ここで $\text{ord}_G(g)$ は g の G における位数である。

⁴ 有限群 G の元 $g \in G$ について、 $C_G(g)$ はその中心化群 $\{h \in G \mid gh = hg\}$ を意味している。

⁵ 要するに、 $\mathcal{C}$ は G の共役類のいくつかの合併である。

$\mathfrak{S}_w$ の大島正則元による⁶ブロックとの “generalized perfect isometry” に基づくものであり、 $\ell = p$ が素数の場合に限っても新しい証明になっている⁷。

定理 2.3 ([KOR, Theorem 5.13]). $\ell \geq 2$ を自然数とする。 $\lambda, \mu \in \text{Par}(n)$ について、 χ_λ と χ_μ が同一の ℓ -ブロックに属することと、 λ と μ が同一の ℓ -コア⁸を持つことは同値である。

2.3 カルタン群 (あるいは一般化カルタン不変量)

定義 2.4 ([KOR, §1]). G を有限群、 $\mathcal{C}$ は共役不変かつ *closed* とする。ここで $\mathcal{C}$ が *closed* であるとは、任意の $x \in \mathcal{C}$ と任意の $y \in G$ について、 $\langle x \rangle = \langle y \rangle$ ならば $y \in \mathcal{C}$ となることを言う。

(a) $\mathcal{C}(G)$ の 2 つの部分加群 $\mathcal{R}_G(\mathcal{C})$ と $\mathcal{P}_G(\mathcal{C})$ を以下で定義する。

$$\begin{aligned}\mathcal{R}_G(\mathcal{C}) &= \text{span}_{\mathbb{Z}}\{\chi^{\mathcal{C}} \mid \chi \in \text{Irr}(\text{CG})\}, \\ \mathcal{P}_G(\mathcal{C}) &= \mathcal{R}_G(\mathcal{C}) \cap \text{span}_{\mathbb{Z}}\{\chi \mid \chi \in \text{Irr}(\text{CG})\}.\end{aligned}$$

ここで $\text{Irr}(\text{CG})$ は G の通常既約指標の集合であり、 $f \in \mathcal{C}(G)$ について $f^{\mathcal{C}} \in \mathcal{C}(G)$ とは、 $f^{\mathcal{C}}|_{\mathcal{C}} = f|_{\mathcal{C}}$ かつ $f^{\mathcal{C}}_{G \setminus \mathcal{C}} = 0$ となる G の類関数を意味する。

(b) G の $\mathcal{C}$ に関するカルタン群 $\text{Cart}_G(\mathcal{C})$ を $\mathcal{R}_G(\mathcal{C})/\mathcal{P}_G(\mathcal{C})$ で定義する。これは有限群である。

有限アーベル群 $\text{Cart}_G(\mathcal{C})$ の同型類を一般化カルタン不変量と呼ぶ。 $\ell = p \geq 2$ が素数で、 $\mathcal{C} = G_{p'}$ のとき、一般化カルタン不変量は通常のカルタン不変量⁹と (実質的に) 同じ概念である。定理 1.2 から分かるように、通常のカルタン不変量は、群のある種の中心化群の情報を含んでいる。

2.4 KOR 予想

$p \geq 2$ が素数のときは、定理 1.2 より $\text{Cart}_{\mathfrak{S}_n}(\mathcal{C}_{p'})$ の同型類が分かる¹⁰。[KOR]において、一般の $\ell \geq 2$ について、 $\text{Cart}_{\mathfrak{S}_n}(\mathcal{C}_{\ell'})$ の同型類が以下のように予想されている¹¹。

定義 2.5. Π を素数の集合の部分集合とする。 $n \in \mathbb{N}_+$ について、

- (a) $\text{pdiv}(n)$ を、 n の素因数の集合とする ($n = 1$ のとき $\text{pdiv}(n) = \emptyset$ である)。
- (b) n_{Π} を n の Π -数とする。すなわち、 $n \in n_{\Pi}\mathbb{Z}$ と $\text{pdiv}(n_{\Pi}) \subseteq \Pi$, $\text{pdiv}(n/n_{\Pi}) \cap \Pi = \emptyset$ で特徴付けられるただ 1 つの自然数とする。

予想 2.6 ([KOR, Conjecture 6.4]). $\ell \geq 2$ を自然数とする。分割 λ について、

$$r_{\ell}(\lambda) = \prod_{k \in \mathbb{N}_+ \setminus \ell\mathbb{Z}} (\ell/\gcd(\ell, k))^{\lfloor \frac{m_k(\lambda)}{\ell} \rfloor} \cdot \left\lfloor \frac{m_k(\lambda)}{\ell} \right\rfloor!_{\text{pdiv}(\ell/\gcd(\ell, k))}$$

と定義する。このとき任意の $n \geq 0$ について、以下が成立する¹²。

$$\text{Cart}_{\mathfrak{S}_n}(\mathcal{C}_{\ell'}) \cong \bigoplus_{\lambda \in \text{CRP}_{\ell}(n)} \mathbb{Z}/r_{\ell}(\lambda)\mathbb{Z}.$$

⁶大島勝氏に由来する。彼らは Osima's set of “regular conjugacy classes” と書いている [KOR, pp.533]。

⁷証明には大島氏による Murnaghan-Nakayama 公式の一般化 [Osi, §3] が役割を果たす。

⁸分割 λ が ℓ -コアとは、対応する λ 型のヤング図形から長さ ℓ のフックが 1 つも抜けないことを意味する。

⁹カルタン不変量とは、カルタン行列 $C_{\mathbb{F}_p G}$ の単因子の (多重集合の) ことである。

¹⁰ $\lambda \in \text{Par}(n)$ について、 $g \in C_{\lambda}$ の中心化群 $C_{\mathfrak{S}_n}(g)$ は $\bigoplus_{k \geq 1} (\mathbb{Z}/k\mathbb{Z}) \wr \mathfrak{S}_{m_k(\lambda)}$ と同型になる [JK, Chapter 4]。

¹¹彼らがどのようにして KOR 予想に至ったのかに関するヒューリスティックは [KOR, pp.545–546] で説明されている。

¹²相異なる $\lambda, \mu \in \text{CRP}_{\ell}(n)$ について、 $r_{\ell}(\lambda) \notin r_{\ell}(\mu)\mathbb{Z}$ かつ $r_{\ell}(\mu) \notin r_{\ell}(\lambda)\mathbb{Z}$ となり得る。

予想 2.6 が KOR 予想の正確な命題である。KOR 予想は、当時 Kleshchev の学生だった David Hill 氏の博士論文で次の条件 (*) を満たす任意の $\ell \geq 2$ について肯定的に解決された。

(*) ℓ の素因数分解が $\ell = p_1^{r_1} \cdot p_2^{r_2} \cdots$ のとき¹³、任意の i について $r_i \leq p_i$

3 リー理論

今まで有限群 (対称群) のモジュラー表現論の話をしてきたので唐突に感じるかもしれないが、量子群に関する予備知識を復習することにする。量子群やその表現に関する事柄は、標数 0 の世界で考えることに注意しよう。以下 v を不定元とし、体 $\mathbf{k} = \mathbb{Q}(v)$ とその部分環 $\mathscr{A} = \mathbb{Z}[v, v^{-1}]$ のために記号 $\mathbf{k}$ と $\mathscr{A}$ を固定する。また $\mathbf{k}$ の 2 つの環対合として、恒等写像 $\text{id}_{\mathbf{k}}$ および、 v を v^{-1} に写すような $\mathbb{Q}$ -代数対合 $\tau: \mathbf{k} \rightarrow \mathbf{k}$ も記号を固定する。

3.1 量子群

量子群の定義を復習する。 $A = (a_{ij})_{i,j \in I}$ を対称化可能な GCM とし、 $d = (d_i)_{i \in I}$ を A の symmetrization とする¹⁴。 $(\mathcal{P}, \mathcal{P}^\vee, \Pi, \Pi^\vee)$ を A のカルタン・データとする。すなわち、

- (a) $\mathcal{P}^\vee$ は階数 $(2|I| - \text{rank } A)$ の自由加群で、 $\mathcal{P} = \text{Hom}_{\mathbb{Z}}(\mathcal{P}^\vee, \mathbb{Z})$ 、
- (b) $\Pi^\vee = \{h_i \mid i \in I\}$ は $\mathbb{Z}$ -線型独立な $\mathcal{P}^\vee$ の部分集合、
- (c) $\Pi = \{\alpha_i \mid i \in I\}$ は $\mathbb{Z}$ -線型独立な $\mathcal{P}$ の部分集合、
- (d) 任意の $i, j \in I$ について、 $\alpha_j(h_i) = a_{ij}$ が成り立つ。

$\mathcal{P}^+$ で支配的整ウェイトの集合 $\{\lambda \in \mathcal{P} \mid \forall i \in I, \lambda(h_i) \in \mathbb{N}\}$ を表し、各 $i \in I$ について $\Lambda_i \in \mathcal{P}^+$ を基本支配的整ウェイトとする¹⁵。また、ワイル群 $W = W(A)$ は $\{s_i: \mathfrak{h}^* \xrightarrow{\sim} \mathfrak{h}^*, \lambda \mapsto \lambda - \lambda(h_i)\alpha_i \mid i \in I\}$ で生成される $\text{GL}(\mathfrak{h}^*)$ の部分群で、 $\mathcal{P}(\subseteq \mathfrak{h}^*)$ にも作用するのであった。以下では、次の標準的な略記法も用いる (ここで $i \in I$ かつ $n \geq m \geq 0$)。 $v_i = v^{d_i}$, $[n]_\ell = \sum_{k=1}^n v^{(n+1-2k)\ell}$, $[n]_\ell! = \prod_{m=1}^n [m]_\ell$, $\begin{bmatrix} n \\ m \end{bmatrix}_i = \frac{[n]_i!}{[m]_i! [n-m]_i!}$ 。

定義 3.1. 量子群 $U_v = U_v(A)$ とは、 $\{e_i, f_i \mid i \in I\} \cup \{v^h \mid h \in \mathcal{P}^\vee\}$ で生成され、次を定義関係式に持つ $\mathbf{k}$ 上の単位的結合的代数である。

- (a) $v^0 = 1$ かつ、任意の $h, h' \in \mathcal{P}$ について $v^h v^{h'} = v^{h+h'}$ 、
- (b) 任意の $i \in I$ と $h \in \mathcal{P}$ について、 $v^{-h} e_i v^h = v^{\alpha_i(h)} e_i$, $v^{-h} f_i v^h = v^{-\alpha_i(h)} f_i$ 、
- (c) 任意の $i, j \in I$ について、 $e_i f_j - f_j e_i = \delta_{ij} (K_i - K_i^{-1}) / (v_i - v_i^{-1})$ 、
- (d) $i \neq j$ なる任意の $i, j \in I$ について、 $\sum_{k=0}^{1-a_{ij}} (-1)^k e_i^{(k)} e_j e_i^{(1-a_{ij}-k)} = 0$ 、
- (e) $i \neq j$ なる任意の $i, j \in I$ について、 $\sum_{k=0}^{1-a_{ij}} (-1)^k f_i^{(k)} f_j f_i^{(1-a_{ij}-k)} = 0$ 。

ただし $K_i = v^{d_i h_i}$, $v_i = v^{d_i}$ かつ $e_i^{(n)} = e_i^n / [n]_{d_i}!$, $f_i^{(n)} = f_i^n / [n]_{d_i}!$ である。

¹³ もちろん $i \neq j$ ならば $p_i \neq p_j$ である。

¹⁴ 任意の $i, j \in I$ について、 $d_i a_{ij} = d_j a_{ji}$ となり、かつ $\gcd(d_i)_{i \in I} = 1$ となるようなただ 1 つの $d \in \mathbb{N}_+^I$ のこと。

¹⁵ Λ_i は $\mathcal{P}$ の部分群 $\{\lambda \in \mathcal{P} \mid \forall i \in I, \lambda(h_i) = 0\}$ の ambiguity を除いて $\forall j \in I, \Lambda_i(h_j) = \delta_{ij}$ で決まる $\mathcal{P}^+$ の元。

3.2 Shapovalov form の変種

定義 3.2 ([Lus, §3.4.5]). $\lambda \in \mathcal{P}$ について、Verma 加群を次の左 U_v -加群として定義する。

$$M(\lambda) = U_v / \left(\sum_{h \in \mathcal{P}} U_v(v^h - v^{\lambda(h)}) + \sum_{i \in I} U_v e_i \right).$$

$M(\lambda)$ は U_v^- -加群として階数 1 の自由加群であり、 $M(\lambda)$ は最大真部分 U_v -加群 $K(\lambda)$ を持つ。そこで $\lambda \in \mathcal{P}$ について、既約 U_v -加群を $V(\lambda) = M(\lambda)/K(\lambda)$ によって定義する。

定義 3.3. $\mathbb{F}$ を体、 V を $\mathbb{F}$ 上のベクトル空間とする。

- (a) 写像 $B: V \times V \rightarrow \mathbb{F}$ が双加法的であるとは、任意の $w, w_1, w_2 \in V$ について、 $B(w_1 + w_2, w) = B(w_1, w) + B(w_2, w)$ と $B(w, w_1 + w_2) = B(w, w_1) + B(w, w_2)$ が成り立つことを言う。
- (b) 双加法的な $B: V \times V \rightarrow \mathbb{F}$ について、その根基 $\text{Rad}(B)$ を次の 2 つの加群が一致するときに限って、それとして定義する（一致しない場合は $\text{Rad}(B)$ を定義しない）。

$$\{w_1 \in V \mid \forall w_2 \in V, B(w_1, w_2) = 0\}, \quad \{w_2 \in V \mid \forall w_1 \in V, B(w_1, w_2) = 0\}.$$

- (c) 双加法的な写像 B が非退化であるとは、 $\text{Rad}(B)$ が定義されて $\text{Rad}(B) = 0$ となることを言う。

U_v は次で定まる $\mathbb{Q}$ -環反対合 Ω と $\mathbb{Q}$ -環反同型 Υ を持つ。

$$\begin{aligned} \Omega(e_i) &= f_i, & \Omega(f_i) &= e_i, & \Omega(v^h) &= v^{-h}, & \Omega(v) &= v^{-1}, \\ \Upsilon(e_i) &= v_i f_i K_i^{-1}, & \Upsilon(f_i) &= v_i^{-1} K_i e_i, & \Upsilon(v^h) &= v^{-h}, & \Upsilon(v) &= v^{-1}. \end{aligned}$$

以下は、リー環の標準的な教科書にある Shapovalov form の存在と同様にして確認できる。

命題 3.4 ([Tsu, Proposition 3.8]). $\lambda \in \mathcal{P}$ について、以下を満たす非退化で双加法的な写像 $\langle, \rangle_{\text{QSh}}: V(\lambda) \times V(\lambda) \rightarrow \mathbf{k}$ および $\langle, \rangle_{\text{RSh}}: V(\lambda) \times V(\lambda) \rightarrow \mathbf{k}$ がそれぞれ唯一つずつ存在する。

- (i) $\langle aw_1, w_2 \rangle_X = \tau(a) \langle w_1, w_2 \rangle_X$ 、 $\langle w_1, aw_2 \rangle_X = a \langle w_1, w_2 \rangle_X$ かつ $\langle w_1, w_2 \rangle_X = \tau(\langle w_2, w_1 \rangle_X)$ 、
- (ii) $\langle 1_\lambda, 1_\lambda \rangle_X = 1$ かつ $\langle uw_1, w_2 \rangle_{\text{QSh}} = \langle w_1, \Omega(u)w_2 \rangle_{\text{QSh}}$ かつ $\langle uw_1, w_2 \rangle_{\text{QSh}} = \langle w_1, \Upsilon(u)w_2 \rangle_{\text{RSh}}$ 。

ここで $X \in \{\text{QSh}, \text{RSh}\}$ であり、 $w_1, w_2 \in V(\lambda)$ 、 $u \in U_v$ 、 $a \in \mathbf{k}$ である。

3.3 Lusztig 格子

定理 3.5 ([Lus, Theorem 14.4.3], [Lus2, Theorem 4.5]). $U_v^\mathscr{A}$ を $\{e_i^{(n)}, f_i^{(n)}, K_i^{\pm 1} \mid i \in I, n \geq 0\}$ で生成される U_v の部分 $\mathscr{A}$ -代数とする。このとき $U_v^\mathscr{A}$ は U_v の $\mathscr{A}$ -格子である¹⁶。

さて、 U_v -加群 M が可積分であるとは、以下の 2 条件を満たすことであった。

- (i) M はウェイト空間分解を持つ。すなわち $\nu \in \mathcal{P}$ について $M_\nu = \{m \in M \mid \forall h \in \mathcal{P}^\vee, v^h m = v^{\nu(h)} m\}$ とすると、 $\dim M_\nu < +\infty$ かつ $M = \bigoplus_{\nu \in \mathcal{P}} M_\nu$ となる。
- (ii) 任意の $m \in M$ と任意の $i \in I$ について、ある $n > 0$ が存在して $f_i^n m = e_i^n m = 0$ となる。

¹⁶ $\mathbb{F}$ を体、 $R \subseteq \mathbb{F}$ をその部分環とする。 $\mathbb{F}$ -ベクトル空間 V とその R -部分加群 W について、 W が自由 R -加群で、かつ包含 $W \subseteq V$ が同型 $\mathbb{F} \otimes_R W \xrightarrow{\sim} V$ を誘導するとき、 W は V の R -格子であると言う。

以下のことはよく知られている [Lus, Proposition 3.5.8, Proposition 5.2.7].

- (a) $\lambda \in \mathcal{P}$ について、 $V(\lambda)$ が可積分であることと $\lambda \in \mathcal{P}^+$ であることは同値。
 (b) $\lambda \in \mathcal{P}^+$ について、 $V(\lambda)$ のウェイトの集合 $P(\lambda) := \{\mu \in \mathcal{P} \mid V(\lambda)_\mu \neq 0\}$ は W -不変。

定理 3.6 ([Lus, Theorem 14.4.11]). $\lambda \in \mathcal{P}^+$ とすると、 $V(\lambda)^\mathscr{A} := U_\mathscr{V}^\mathscr{A} 1_\lambda$ は $V(\lambda)$ の $\mathscr{A}$ -格子である。さらに任意の $\nu \in P(\lambda)$ について、 $V(\lambda)_\nu^\mathscr{A} := V(\lambda)_\nu \cap V(\lambda)^\mathscr{A}$ は $V(\lambda)_\nu$ の $\mathscr{A}$ -格子である。

3.4 グラム行列

定義 3.7. 以下の 6 組 $(\mathbb{F}, \varepsilon, R, V, S, V^R)$ について、グラム行列を $\text{GM}_{\mathbb{F}, \varepsilon, R}(V, S, V^R) = (S(w_i, w_j))_{1 \leq i, j \leq \dim V}$ と定義する。ここで $(w_i)_{1 \leq i \leq \dim V}$ は V^R の自由 R -基底である。

- (a) $\mathbb{F}$ は体、 $\varepsilon: \mathbb{F} \xrightarrow{\sim} \mathbb{F}$ は環対合で、 R は $\varepsilon(R) \subseteq R$ となる $\mathbb{F}$ の部分環、
 (b) V は $\mathbb{F}$ 上の有限次元ベクトル空間で、 V^R は V の R -格子、
 (c) $S: V \times V \rightarrow \mathbb{F}$ は、任意の $w_1, w_2 \in V$ と $a \in \mathbb{F}$ について $S(aw_1, w_2) = \varepsilon(a)S(w_1, w_2)$ と $S(w_1, aw_2) = aS(w_1, w_2)$ を満たす双加法的で非退化な写像。

X と Y を V^R の 2 つの異なる自由 R -基底の選択に付随したグラム行列とすると、適当な $P \in \text{GL}_{\dim V}(R)$ が存在して $X = \varepsilon(\text{tr } P)YP$ となることに注意しよう。

定義 3.8. $\lambda \in \mathcal{P}^+$ と $\mu \in P(\lambda)$ について、以下の 2 つのグラム行列を定義する。

$$\begin{aligned} \text{QSh}_{\lambda, \mu}^M &= \text{QSh}_{\lambda, \mu}^M(A) = \text{GM}_{\mathbf{k}, \tau, \mathscr{A}}(V(\lambda)_\mu, \text{QSh}, V(\lambda)_\mu^\mathscr{A}), \\ \text{RSh}_{\lambda, \mu}^M &= \text{RSh}_{\lambda, \mu}^M(A) = \text{GM}_{\mathbf{k}, \tau, \mathscr{A}}(V(\lambda)_\mu, \text{RSh}, V(\lambda)_\mu^\mathscr{A}). \end{aligned}$$

このとき、以下を示すのは難しくない [Tsu, §3].

命題 3.9. $\lambda \in \mathcal{P}^+$ と $\mu \in P(\lambda)$ について、対角成分が $v^{\mathbb{Z}}$ に属するような対角行列 D で $\det D = 1$ なるものが存在して、 $D\text{QSh}_{\lambda, \mu}^M = \text{RSh}_{\lambda, \mu}^M$ となるように両辺のグラム行列を取ることが出来る。

命題 3.10. $\lambda \in \mathcal{P}^+, \mu \in P(\lambda), i \in I$ について、 $\text{QSh}_{\lambda, \mu}^M = \text{QSh}_{\lambda, s_i(\mu)}^M$ と両辺のグラム行列を取れる。

4 Khovanov-Lauda-Rouquier 代数

2007 年に、Khovanov-Lauda と Rouquier によって独立に、量子群の半分を圏論化する代数の族 (KLR 代数) が導入された [KL1, KL2, Rou].

定義 4.1 ([Rou, §3.2.1]). $\mathbb{F}$ を体、 I を有限集合とし、 $Q = (Q_{ij}(u, v)) \in \text{Mat}_I(\mathbb{F}[u, v])$ を $Q_{ii} = 0$ かつ、任意の $i, j \in I$ について $Q_{ij}(u, v) = Q_{ji}(v, u)$ となるように取る。

- (a) $n \geq 0$ について、KLR 代数 $R_n(\mathbb{F}; Q)$ とは $\{x_p, \tau_a, e_\nu \mid 1 \leq p \leq n, 1 \leq a < n, \nu \in I^n\}$ で生成され、次を定義関係式に持つ $\mathbb{F}$ 上の単位的結合的代数である。

$$\begin{aligned} & \bullet e_\mu e_\nu = \delta_{\mu\nu} e_\mu, 1 = \sum_{\mu \in I^n} e_\mu, x_p x_q = x_q x_p, x_p e_\mu = e_\mu x_p, & \bullet \tau_a \tau_b = \tau_b \tau_a \text{ if } |a - b| > 1, \\ & \bullet \tau_a^2 e_\nu = Q_{\nu_a, \nu_{a+1}}(x_a, x_{a+1}) e_\nu, \tau_a e_\mu = e_{s_a(\mu)} \tau_a, & \bullet \tau_a x_p = x_p \tau_a \text{ if } p \neq a, a+1, \\ & \bullet (\tau_a x_{a+1} - x_a \tau_a) e_\nu = (x_{a+1} \tau_a - \tau_a x_a) e_\mu = \delta_{\nu_a, \nu_{a+1}} e_\nu, \\ & \bullet (\tau_{b+1} \tau_b \tau_{b+1} - \tau_b \tau_{b+1} \tau_b) e_\nu = \delta_{\nu_b, \nu_{b+2}} ((x_{b+2} - x_b)^{-1} (Q_{\nu_b, \nu_{b+1}}(x_{b+2}, x_{b+1}) - Q_{\nu_b, \nu_{b+1}}(x_b, x_{b+1}))) e_\nu. \end{aligned}$$

(b) $n = \text{ht}(\beta) := \sum_{i \in I} \beta_i$ となる $\beta = \sum_{i \in I} \beta_i \cdot i \in \mathbb{N}[I]$ について、 $R_\beta(\mathbb{F}; Q) = R_n(\mathbb{F}; Q)e_\beta$ を $e_\beta = \sum_{\nu \in \text{Seq}(\beta)} e_\nu$ と $\text{Seq}(\beta) = \{(i_j)_{j=1}^n \in I^n \mid \sum_{j=1}^n i_j = \beta\}$ によって定める。

(c) $\lambda = \sum_{i \in I} \lambda_i \cdot i \in \mathbb{N}[I]$ と $n = \text{ht}(\beta)$ なる $\beta \in \mathbb{N}[I]$ について、以下のように定める。

$$\begin{aligned} R_n^\lambda(\mathbb{F}; Q) &= R_n(\mathbb{F}; Q) / R_n(\mathbb{F}; Q) \left(\sum_{\nu \in I^n} x_1^{\lambda_{\nu_1}} e_\nu \right) R_n(\mathbb{F}; Q), \\ R_\beta^\lambda(\mathbb{F}; Q) &= R_\beta(\mathbb{F}; Q) / R_\beta(\mathbb{F}; Q) \left(\sum_{\nu \in \text{Seq}(\beta)} x_1^{\lambda_{\nu_1}} e_\nu \right) R_\beta(\mathbb{F}; Q). \end{aligned}$$

KLR 代数についての PBW 型定理 [Rou, Theorem 3.7] より、 $\{e_\beta \mid \text{ht}(\beta) = n\}$ が $R_n(\mathbb{F}; Q)$ のすべての中心的幂等元を尽くすことが分かる。また $R_n^\lambda(\mathbb{F}; Q)$ と $R_\beta^\lambda(\mathbb{F}; Q)$ が、共に有限次元 $\mathbb{F}$ -代数であることを示すのは難しくない。

定義 4.2 ([Rou, §3.2.3]). $A = (a_{ij})_{i,j \in I}$ を対称化可能な GCM とし、 $d = (d_i)_{i \in I}$ を A の *symmetrization* とする。 $Q^A = (Q_{ij}^A(u, v)) \in \text{Mat}_I(\mathbb{F}[u, v])$ を、以下を満たすように取る。

$$Q_{ii}^A(u, v) = 0, \quad Q_{ij}^A(u, v) = Q_{ji}^A(v, u), \quad t_{i,j,-a_{ij},0} = t_{j,i,0,-a_{ij}} \neq 0.$$

ここで $i, j \in I$ かつ、 $Q_{ij}^A(u, v) = \sum_{\substack{p,q \geq 0 \\ pd_i + qd_j = -d_i a_{ij}}} t_{ijpq} u^p v^q$ である。

$n \geq 0$ と $\text{ht}(\beta) = n$ なる $\lambda, \beta \in \mathbb{N}[I]$ について、 $R_n(\mathbb{F}; Q^A)$, $R_\beta(\mathbb{F}; Q^A)$, $R_n^\lambda(\mathbb{F}; Q^A)$, $R_\beta^\lambda(\mathbb{F}; Q^A)$ は全て以下の割り当てによって $\mathbb{Z}$ -次数付き代数となる。

$$\deg(e_\nu) = 0, \quad \deg(x_p e_\nu) = 2d_{\nu_p}, \quad \deg(\tau_a e_\nu) = -d_{\nu_a} a_{\nu_a, \nu_{a+1}}.$$

また、対応 $\sum_{i \in I} \beta_i \cdot i \mapsto \sum_{i \in I} \beta_i \Lambda_i$ によって、 $\mathbb{N}[I]$ と $\bigoplus_{i \in I} \mathbb{N} \Lambda_i (\subseteq \mathcal{P}^+)$ を断りなく同一視する。

4.1 対称群の群代数と KLR 代数

定義 4.3. $\ell \geq 2$ を自然数とすると、 $Q_\ell \in \text{Mat}_{\mathbb{Z}/\ell\mathbb{Z}}(\mathbb{Z}[u, v])$ を以下で定義し、体 $\mathbb{F}$ について $Q_\ell^\mathbb{F} \in \text{Mat}_{\mathbb{Z}/\ell\mathbb{Z}}(\mathbb{F}[u, v])$ を Q_ℓ の自然な像とする。

$$(Q_\ell)_{i,j} = \begin{cases} -(u-v)^2 & (\ell = 2 \text{ かつ } i \neq j) \\ \pm(v-u) & (\ell \geq 3 \text{ かつ } j = i \pm 1) \\ 1 & (\ell \geq 3 \text{ かつ } j \neq i, i \pm 1) \\ 0 & (\text{それ以外}). \end{cases}$$

定義 4.4. $\ell \geq 2, n \geq 0$ を自然数とする。

- (a) $|\rho| + \ell d = n$ となるような ℓ -コア ρ と自然数 $d \geq 0$ の組 (ρ, d) の集合を $\text{Bl}_\ell(n)$ とする。
- (b) $(\rho, d) \in \text{Bl}_\ell(n)$ について、 ℓ -コアが ρ となるような $\lambda \in \text{Par}(n)$ の集合を $B_\ell^{\rho,d} (\subseteq \text{Par}(n))$ とする。

定義 4.5. $p \geq 2$ を素数とする。 $(\rho, d) \in \text{Bl}_p(n)$ について、以下を定義する。

- (a) $e_{\rho,d} = \sum_{\lambda \in B_p^{\rho,d}} \frac{\chi_\lambda(1)}{n!} \sum_{g \in \mathfrak{S}_n} \chi_\lambda(g) g^{-1}$,
- (b) $\beta_{\rho,d} = \sum_{x \in \rho} \text{res}(x) + d \cdot \sum_{y \in \mathbb{Z}/p\mathbb{Z}} y \in \mathbb{N}[\mathbb{Z}/p\mathbb{Z}]$. ここで $\sum_{x \in \rho}$ は x が ρ の箱を走る和を意味し、 x が i 行 j 列にあるとき $\text{res}(x) = j - i + p\mathbb{Z}$ である。

$e_{\rho,d}$ は先験的には $\mathbb{Q}\mathfrak{S}_n$ の元であるが、中山予想によって $\mathbb{F}_p\mathfrak{S}_n$ の元に reduction できる。そして $\{e_{\rho,d} \mid (\rho,d) \in \text{Bl}_p(n)\}$ は $\mathbb{F}_p\mathfrak{S}_n$ の原始的中心的冪等元 (ブロック冪等元) を尽くす。

定理 4.6 ([Rou, BK2]). $\mathbb{F}$ を標数 $p > 0$ の体とする。任意の $(\rho,d) \in \text{Bl}_p(n)$ について、 $\mathbb{F}$ -代数としての同型 $\mathbb{F}\mathfrak{S}_n e_{\rho,d} \cong R_{\beta_{\rho,d}}^{\Lambda_0}(\mathbb{F}; \mathbb{Q}_p^{\mathbb{F}})$ が存在する。特に $\mathbb{F}\mathfrak{S}_n \cong R_n^{\Lambda_0}(\mathbb{F}; \mathbb{Q}_p^{\mathbb{F}})$ である。

4.2 A 型岩堀・ヘッケ環と KLR 代数

以上のように対称群の群代数は、KLR 代数の有限次元商になり、特に次数付き代数になる (対称群の群代数の斉次表示)。同じ結果が A 型岩堀・ヘッケ環でも成立する。

定義 4.7. R を可換整域とし、 $q \in R$ を固定する。A 型岩堀・ヘッケ環とは、 $\{T_i \mid 1 \leq i < n\}$ で生成され、以下を定義関係式に持つ R -代数である ($1 \leq a \leq n-2$ かつ $1 \leq b, c < n$ で $|b-c| > 1$)。

$$(T_b + 1)(T_b - q) = 0, \quad T_a T_{a+1} T_a = T_{a+1} T_a T_{a+1}, \quad T_b T_c = T_c T_b.$$

定義 4.8. $\ell \geq 2$ について、1 の原始 ℓ 乗根¹⁷ η_ℓ を持つような体 k_ℓ を考え、記号を固定する。

$\ell \geq 2$ と $n \geq 0$ について、以下が知られている。そこで、 $(\rho,d) \in \text{Bl}_\ell(n)$ について、 $e'_{\rho,d}$ を [DJ, §5] の意味で対応する $\mathcal{H}_n(k_\ell; \eta_\ell)$ の原始的中心的冪等元とする。

- (i) k_ℓ は $\mathcal{H}_n(k_\ell; \eta_\ell)$ の分解体 [Don, §2.2]、
- (ii) $\text{Bl}_\ell(n)$ は、 $\mathcal{H}_n(k_\ell; \eta_\ell)$ の原始的中心的冪等元をパラメトライズする。

定理 4.9 ([Rou, BK2]). $\ell \geq 2$ を自然数とする。任意の $(\rho,d) \in \text{Bl}_\ell(n)$ について、 k_ℓ -代数としての同型 $\mathcal{H}_n(k_\ell; \eta_\ell) e'_{\rho,d} \cong R_{\beta_{\rho,d}}^{\Lambda_0}(k_\ell; \mathbb{Q}_\ell^{k_\ell})$ が存在する。特に $\mathcal{H}_n(k_\ell; \eta_\ell) \cong R_n^{\Lambda_0}(k_\ell; \mathbb{Q}_\ell^{k_\ell})$ である。

$\ell \geq 2$ として、 k_ℓ が $\text{char } k_\ell = 0$ の場合は、次数付きの LLTA 理論 [BK3, Corollary 5.15] と次数付き Brauer-Humphreys 相互律 [HM, Theorem 2.17] から $C_{e'_{\rho,d}}^v \mathcal{H}_n(k_\ell; \eta_\ell) e'_{\rho,d} = \text{tr } D_{\rho,d} D_{\rho,d}$ を得る。つまり、次数付きカルタン行列そのものをリー理論を用いて記述できる。ここで $D_{\rho,d} = (d_{\lambda,\mu}(v))_{\lambda \in B_\ell^{\rho,d}, \mu \in B_\ell^{\rho,d} \cap \text{RP}_\ell(d)}$ で、 $\text{RP}_\ell(d)$ は ℓ -正則な d の分割の集合であり、林による $U_v(A_{\ell-1}^{(1)})$ のフック空間表現 $\mathcal{F} = \bigoplus_{\lambda \in \text{Par}} \mathbf{k}|\lambda\rangle$ と $V(\Lambda_0) \cong U_v(A_{\ell-1}^{(1)})|\phi\rangle$ 上の Lusztig の標準基底 (= 柏原の lower 大域基底) $\bigsqcup_{n \geq 0} \{G(\mu) := \sum_{\lambda \in \text{Par}(n)} d_{\lambda,\mu}(v)|\lambda\rangle \mid \mu \in \text{RP}_\ell(n)\}$ を思い出そう [LLT, §6]。

5 圏論化

5.1 次数付き表現論による圏論化と量子化

定義 5.1. A を体 $\mathbb{F}$ 上の次数付き有限次元代数とする。すなわち A は体 $\mathbb{F}$ 上の有限次元代数であって、任意の $i, j \in \mathbb{Z}$ について $A_i A_j \subseteq A_{i+j}$ となる $\mathbb{F}$ -ベクトル空間の分解 $A = \bigoplus_{i \in \mathbb{Z}} A_i$ を持つ¹⁸。

- (a) $\text{Mod}_{\text{gr}}(A)$ は有限次元左次数付き A -加群と次数を保つ A -準同型からなるアーベル圏を意味し、 $\text{Proj}_{\text{gr}}(A)$ は有限次元左次数付き A -射影加群からなる $\text{Mod}_{\text{gr}}(A)$ の充満部分圏を意味する。

¹⁷ 標数が 0 の場合、1 の原始 ℓ 乗根は同一の定義多項式 (円分多項式) を持つが、正標数では必ずしもそうではない。しかし少なくとも本稿に必要な結果には、そのような差異は影響を及ぼさない。

¹⁸ このとき $1 \in A_0$ が自動的に導出される。

(b) $\text{Mod}_{\text{gr}}(A)$ の対象 $M = \bigoplus_{i \in \mathbb{Z}} M_i$ と $k \in \mathbb{Z}$ について、 $M\langle k \rangle$ とは任意の $n \in \mathbb{Z}$ について $(M\langle k \rangle)_n = M_{k+n}$ となる $\text{Mod}_{\text{gr}}(A)$ の対象の略記法である。割り当て $(M \xrightarrow{f} N) \mapsto (M\langle k \rangle \xrightarrow{f} N\langle k \rangle)$ は $\text{Mod}_{\text{gr}}(A)$ (あるいは $\text{Proj}_{\text{gr}}(A)$) 上の自己圏同値を与える。この同値を $\langle k \rangle$ と書く。

(c) 次数付きカルタン・ペアリング $\omega_A : K_0(\text{Proj}_{\text{gr}}(A)) \times K_0(\text{Mod}_{\text{gr}}(A)) \rightarrow \mathcal{A}$ を次で定める。

$$\langle [P], [M] \rangle \mapsto \sum_{k \in \mathbb{Z}} \dim_{\mathbb{F}} \text{Hom}_A(P, M\langle k \rangle) v^k.$$

(d) A の次数付きカルタン行列 C_A^v を次で定める。

$$\left(\sum_{k \in \mathbb{Z}} [\text{PC}_{\text{Mod}_{\text{gr}}(A)}(D) : D'\langle -k \rangle] v^k \right)_{D, D' \in \text{Irr}(\text{Mod}_{\text{gr}}(A)) / \sim} \in \text{Mat}_{|\text{Irr}(\text{Mod}_{\text{gr}}(A)) / \sim|}(\mathcal{A}).$$

ここで $\text{PC}_{\text{Mod}_{\text{gr}}(A)}(D)$ は $\text{Mod}_{\text{gr}}(A)$ における D の射影被覆であり、 $M \sim N$ は、ある $k \in \mathbb{Z}$ が存在して $\text{Mod}_{\text{gr}}(A)$ として $M\langle k \rangle \cong N$ となることの略記法である。

いくつか簡単な注意をしておこう。

- (i) $\mathbb{F}$ が A の分解体であれば、 $C_A^v = \text{tr}(\omega_A(\text{PC}(D), \text{PC}(D')))_{D, D' \in \text{Irr}(\text{Mod}_{\text{gr}}(A)) / \sim}$ を得る。
- (ii) $K_0(\text{Mod}_{\text{gr}}(A))$ と $K_0(\text{Proj}_{\text{gr}}(A))$ は共に $v = [\langle -1 \rangle]$ によって $\mathcal{A}$ -加群構造を持つ。すなわち $\mathbb{F}$ 代数 A に次数があれば、圏論化を通じて decategorification である $K_0(\text{Mod}(A))$ (あるいは $K_0(\text{Proj}(A))$) の量子化 $K_0(\text{Mod}_{\text{gr}}(A))$ (あるいは $K_0(\text{Proj}_{\text{gr}}(A))$) が得られる。
- (iii) ω_A は、任意の $a \in K_0(\text{Proj}_{\text{gr}}(A))$ と $b \in K_0(\text{Mod}_{\text{gr}}(A))$ について $\omega_A(va, b) = v^{-1}\omega_A(a, b)$ と $\omega_A(a, vb) = v\omega_A(a, b)$ となるという意味において τ -sesquilinear である。
- (iv) C_1^v と C_2^v を異なる $\text{Irr}(\text{Mod}_{\text{gr}}(A)) / \sim$ の代表系の取り方に付随した次数付きカルタン行列とすると、対角成分が $v^{\mathbb{Z}}$ に属するようなある対角行列 D があって、 $C_2^v = \tau(\text{tr} D) C_1^v D$ なる。
- (v) 次数を忘れると、全単射 $\text{Irr}(\text{Mod}_{\text{gr}}(A)) / \sim \xrightarrow{\sim} \text{Irr}(\text{Mod}(A))$ と等式 $C_A^v|_{v=1} = C_{|A|}$ を得る。

5.2 圏論化によるモジュラー表現論とリー理論の対応

定理 4.6 から輸入される対称群の群代数上の次数は、有木の圏論化 $\bigoplus_{n \geq 0} K_0(\text{Proj}(\mathbb{F}\mathfrak{S}_n)) \cong V(\Lambda_0)^{\mathbb{Z}}$ を量子化することが知られている [BK1]。同じことが A 型岩堀・ヘッケ環についても言える。この設定で、以下のようにより強くリー理論とモジュラー表現論とが圏論化を通じて関係する。

定理 5.2 ([BK3, Theorem 4.18]). $\mathbb{F}$ を代数的閉体とする。自然数 $\ell \geq 2$ について $A_{\ell-1}^{(1)}$ 型のカルタン・データを考える。任意の $\lambda \in \mathcal{P}^+$ について、 $U_v^{\mathcal{A}}(A_{\ell-1}^{(1)})$ -加群同型写像 δ と ε であって、

$$\begin{array}{ccc} V(\lambda)^{\mathcal{A}} & \xrightarrow[\delta]{\sim} & \bigoplus_{n \geq 0} K_0(\text{Proj}_{\text{gr}}(R_n^\lambda)) \\ a \downarrow & & \downarrow b \\ V(\lambda)^{\mathcal{A},*} & \xleftarrow[\varepsilon]{\sim} & \bigoplus_{n \geq 0} K_0(\text{Mod}_{\text{gr}}(R_n^\lambda)) \end{array}$$

を可換にするものが存在する。このとき、さらに以下が可換図式になる。

$$\begin{array}{ccc} V(\lambda)^{\mathcal{A}} \otimes_{\mathcal{A}} V(\lambda)^{\mathcal{A},*} & \xrightarrow{\text{RSh}|_{V(\lambda)^{\mathcal{A}} \times V(\lambda)^{\mathcal{A},*}}} & \mathcal{A} \\ \delta \otimes \varepsilon^{-1} \downarrow & & \parallel \\ \bigoplus_{n \geq 0} K_0(\text{Proj}_{\text{gr}}(R_n^\lambda)) \otimes_{\mathcal{A}} \bigoplus_{n \geq 0} K_0(\text{Mod}_{\text{gr}}(R_n^\lambda)) & \xrightarrow{\oplus \omega_{R_n^\lambda}} & \mathcal{A} \end{array}$$

ここで $R_n^\lambda(\mathbb{F}; Q_\ell^F)$ を R_n^λ と略記し、さらに以下の略記を用いた。

- (i) $X \in \{\text{QSh}, \text{RSh}\}$ について、 $V(\lambda)^{\mathcal{A},*} = \{v \in V(\lambda) \mid \forall w \in V(\lambda)^{\mathcal{A}}, \langle v, w \rangle_X \in \mathcal{A}\}$ 。ここで右辺は $X \in \{\text{QSh}, \text{RSh}\}$ の選択に依存しないことに注意。
- (ii) a は包含 $V(\lambda)^{\mathcal{A}} \subseteq V(\lambda)^{\mathcal{A},*}$ で、 b は忘却関手 $\text{Proj}_{\text{gr}}(R_n^\lambda) \rightarrow \text{Mod}_{\text{gr}}(R_n^\lambda)$ から誘導される写像。

定義 5.3. $\ell \geq 2, d \geq 0$ について、 $w \in W(A_{\ell-1}^{(1)})$ を用いて、 $C_{\ell,d}^v = \text{QSh}_{\Lambda_0, w\Lambda_0 - d\delta}^M(A_{\ell-1}^{(1)})$ とする。

$C_{\ell,d}^v$ は命題 3.10 の通り w には依存せず、また $\text{RSh}_{\Lambda_0, w\Lambda_0 - d\delta}^M(A_{\ell-1}^{(1)})$ と命題 3.9 の意味で関連する。そして定理 5.2 の設定において、 $K_0(\text{Mod}_{\text{gr}}(R_n^\lambda))_{\mathbf{k}} := \mathbf{k} \otimes_{\mathcal{A}} K_0(\text{Mod}_{\text{gr}}(R_n^\lambda))$ とし、 $\omega_{R_n^\lambda}^{\mathbf{k}} : K_0(\text{Mod}_{\text{gr}}(R_n^\lambda))_{\mathbf{k}} \times K_0(\text{Mod}_{\text{gr}}(R_n^\lambda))_{\mathbf{k}} \rightarrow \mathbf{k}$ を $\omega_{R_n^\lambda} : K_0(\text{Proj}_{\text{gr}}(R_n^\lambda)) \times K_0(\text{Mod}_{\text{gr}}(R_n^\lambda)) \rightarrow \mathcal{A}$ の拡張とすると、次が成立している。

$$\text{GM}_{\mathbf{k}, \tau, \mathcal{A}}(K_0(\text{Mod}_{\text{gr}}(R_n^\lambda))_{\mathbf{k}}, \omega_{R_n^\lambda}^{\mathbf{k}}, K_0(\text{Proj}_{\text{gr}}(R_n^\lambda))) \equiv \bigoplus_{(\rho, d) \in \text{Bl}_\ell(n)} C_{\ell,d}^v.$$

6 Hill 予想とその次数付き版

KOR 予想はカルタン群 $\text{Cart}_{\mathfrak{S}_n}(\mathcal{C}_{\ell'})$ を $\ell \geq 2$ と $n \geq 0$ について記述するものである。一方で

$$\text{Cart}_{\mathfrak{S}_n}(\mathcal{C}_{\ell'}) \cong \text{Coker}(\mathbb{Z}^{\oplus |\text{Irr}(\text{Mod}(\mathcal{H}_n(k_\ell; \eta_\ell)))|} \rightarrow \mathbb{Z}^{\oplus |\text{Irr}(\text{Mod}(\mathcal{H}_n(k_\ell; \eta_\ell)))|}, x \mapsto x C_{\mathcal{H}_n(k_\ell; \eta_\ell)})$$

となっていることが、以下の結果のとおり知られている。

定理 6.1 ([Don, §2.2]). $\ell \geq 2$ を自然数とする。任意の $n \geq 0$ について、

$$\begin{array}{ccc} K_0(\text{Proj}(\mathcal{H}_n(k_\ell; \eta_\ell))) & \xrightarrow[\theta_n]{\sim} & \mathcal{P}_{\mathfrak{S}_n}(\mathcal{C}_{\ell'}) \\ \downarrow & & \downarrow \\ K_0(\text{Mod}(\mathcal{H}_n(k_\ell; \eta_\ell))) & \xrightarrow[\zeta_n]{\sim} & \mathcal{R}_{\mathfrak{S}_n}(\mathcal{C}_{\ell'}) \end{array}$$

が可換図式になるような加群同型 θ_n と ζ_n が存在する。

すなわち、量子標数 ℓ の A 型岩堀・ヘッケ環のカルタン行列を用いて¹⁹、対称群の ℓ -カルタン群が記述できる。Hill は、当時知られていた定理 5.2 の $v = 1$ 版を用いて、量子標数 ℓ の A 型岩堀・ヘッケ環の表現論を $A_{\ell-1}^{(1)}$ 型リー理論の問題に帰着し、さらに無限変数対称関数環 Λ の問題に帰着した。1つの結論として、Hill は以下の予想が KOR 予想を導くことを示した [Hil]。

予想 6.2 ([Hil, Conjecture 10.5]). $p \geq 2$ を素数、 $r \geq 1$ を自然数とし、 $\ell = p^r$ と置く。

$$\log_p I_{p,r}(\lambda) = \sum_{n \in \mathbb{N}_+ \setminus p^r \mathbb{Z}} ((r - \nu_p(n))m_n(\lambda) + \sum_{t \geq 1} \lfloor m_n(\lambda)/p^t \rfloor)$$

によって p の冪 $I_{p,r}(\lambda)$ を定義すると（ここで λ は分割）、任意の $d \geq 0$ について以下が成立する。

$$C_{\ell,d}^v|_{v=1} \equiv \bigcup_{s=1}^d \bigcup_{\lambda \in \text{Par}(s)} \{I_{p,r}(\lambda)\}^{u(\ell-2, d-s)}.$$

¹⁹ 定義 4.7 の設定において、 $\min\{k \geq 2 \mid 1 + q + \dots + q^{k-1} = 0 \in R\}$ が存在する場合、この値を量子標数と呼ぶ。

実際、予想 6.2 と KOR 予想は同値になっている。Hill は予想 6.2 を任意の素数 $p \geq 2$ と任意の $1 \leq r \leq p$ について証明した [Hil, Theorem 1.3]。このことは、前述の条件 (*) を満たす全ての $\ell \geq 2$ について KOR 予想が成り立つことを含意する。

定義 6.3. 自然数 $n \geq 1$ と $\ell \geq 2$ について、自然数 $a_\ell(n) \geq 1$ と $\nu_\ell(n) \geq 0$ を、 $a_\ell(n)\ell^{\nu_\ell(n)} = n$ と $a_\ell(n) \notin \ell\mathbb{Z}$ で一意的に定まるものと定義する。

予想 6.4 ([Tsu, Conjecture 6.8]). $p \geq 2$ を素数、 $r \geq 1$ を自然数とし、 $\ell = p^r$ と置く。

$$I_{p,r}^v(\lambda) = \prod_{n \in \mathbb{N}_+ \setminus p^r \mathbb{Z}} \prod_{k=1}^{m_n(\lambda)} [p^{r+\nu_p(k)-\nu_p(n)}]_{a_p(k)p^{\nu_p(n)}}$$

と定義すると (ここで λ は分割)、任意の $d \geq 0$ について以下が成り立つ。

$$C_{\ell,d}^v \equiv_{\mathcal{A}} \bigsqcup_{s=1}^d \bigsqcup_{\lambda \in \text{Par}(s)} \{I_{p,r}^v(\lambda)\}^{u(\ell-2,d-s)}. \quad (1)$$

任意の $\lambda \in \text{Par}$ について、明らかに $I_{p,r}^v(\lambda)|_{v=1} = I_{p,r}(\lambda)$ である。従って、予想 6.4 は予想 6.2 を導く。予想 6.4 の設定で、予想 6.4 は明らかに次を導く。

$$C_{\ell,d}^v \equiv_{\mathbb{Q}[v,v^{-1}]} \bigsqcup_{s=1}^d \bigsqcup_{\lambda \in \text{Par}(s)} \{I_{p,r}^v(\lambda)\}^{u(\ell-2,d-s)}. \quad (2)$$

$r = 1$ のとき (つまり $\ell = p$ のとき)、(2) は安東・鈴木・山田の予想 [ASY, Conjecture 8.2 (i)] である²⁰。この予想²¹を一般化することが論文 [Tsu] の動機の 1 つであった。ただし、予想 6.4 はいくつかの具体的な計算結果から帰納した結果であり、成り立つであろう根拠は、(1) の両辺の行列表が等しいこと [Tsu, Theorem 6.11] 以外には今のところ特にない。

また、KOR 予想そのものの次数付けも望ましい。特殊な場合として、 $p \geq 2$ を素数、 $r \geq 1$ として、 $\ell = p^r$ のときの KOR 予想の次数付き版 [Tsu, Conjecture 6.18] を予想 6.4 と同じ要領で提案してみた²²。ここでも [ASY, Conjecture 8.2 (ii)]²³が参考になった。

予想 6.4 が正しく、また予想 6.2 の証明が一般の v でもそのまま働くことを期待すると、予想 6.4 では $v = 1$ の場合 (つまり予想 6.2 の場合) とは異なり、 $\lambda_1, \lambda_2 \in \text{Par}(n)$ について、 $I_{p,r}^v(\lambda_1) \not\equiv_{\mathcal{A}} I_{p,r}^v(\lambda_2)$ かつ $I_{p,r}^v(\lambda_2) \not\equiv_{\mathcal{A}} I_{p,r}^v(\lambda_1)$ となりえるので、 $v = 1$ の証明の制限や洞察をもたらす可能性がある。予想 6.4 が KOR 予想の解決に貢献することを期待して本稿を終えたい。

7 最後に

この度、講演の機会を与えてくださった木本一史さんに感謝いたします。また論文 [ASY] をはじめとして、山田裕史さん、鈴木武史さん、安東雅訓さんには本研究に有益な議論をしていただきました。そして沼田泰英さんには [Tsu] に必要な組合せ論の技法について多くのご指導をいただきました。共にここに記して感謝いたします。

²⁰ もっとも、3 氏とも $\mathcal{A}$ 上のユニモジュラー同値を念頭においていたそう。

²¹ (2) も今のところ未解決であるが、これは予想 6.4 より易しいと思われる。実際、[Tsu, Proposition 2.3] の証明から $C_{\ell,d}^v \equiv_{\mathbb{Q}[v,v^{-1}]} \bigsqcup_{s=1}^d \bigsqcup_{\lambda \in \text{Par}(s)} \{\prod_{i \geq 1} [\ell_i^{m_i(\lambda)}]\}^{u(\ell-2,d-s)}$ が分かる。

²² 正確な命題は省略するが、[Tsu, Conjecture 6.18] は予想 6.4 から導出できる [Tsu, Proposition 6.20]。

²³ こちらは $v = 1$ のときにあたる [UY] が元ネタになっているようだ。

参考文献

- [ASY] M. Ando, T. Suzuki and H-F. Yamada, *Combinatorics for graded Cartan matrices of the Iwahori-Hecke algebra of type A*, to appear in Ann.Comb., arXiv:1005.1134v5.
- [BK1] J. Brundan and A. Kleshchev, *The degenerate analogue of Ariki's categorification theorem*, Math.Z. **266** (2010), 877–919.
- [BK2] J. Brundan and A. Kleshchev, *Blocks of cyclotomic Hecke algebras and Khovanov-Lauda algebras*, Invent.Math. **178** (2009), 451–484.
- [BK3] J. Brundan and A. Kleshchev, *Graded decomposition numbers for cyclotomic Hecke algebras*, Adv.Math. **222** (2009), 1883–1942.
- [BK4] J. Brundan and A. Kleshchev, *Cartan determinants and Shapovalov forms*, Math.Ann. **324** (2002), 431–449.
- [Bra] R. Brauer, *On the Cartan invariants of groups of finite order*, Ann.of Math.(2) **42** (1941), 53–61.
- [BrNe] R. Brauer and C. Nesbitt, *On the modular characters of groups*, Ann.of Math.(2) **42** (1941), 556–590.
- [BrRo] R. Brauer and G. de B. Robinson, *On a conjecture by Nakayama*, Trans.Roy.Soc.Canada.Sect.III. **41** (1947), 11–19/20–25.
- [DJ] R. Dipper and G. James, *Blocks and idempotents of Hecke algebras of general linear groups*, Proc.London Math.Soc. **54** (1987), 57–82.
- [Don] S. Donkin, *Representations of Hecke algebras and characters of symmetric groups*, Studies in memory of Issai Schur, 49–67, Progr.Math., **210**, Birkhäuser Boston, Boston, MA, 2003.
- [Hil] D. Hill, *Elementary divisors of the Shapovalov form on the basic representation of Kac-Moody algebras*, J.Algebra **319** (2008), 5208–5246.
- [HM] J. Hu and A. Mathas, *Graded cellular bases for the cyclotomic Khovanov-Lauda-Rouquier algebras of type A*, Adv.Math. **225** (2010), 598–642.
- [JK] G. James and A. Kerber, *The representation theory of the symmetric group*, Encyclopedia of Mathematics and its Applications **16**, Addison-Wesley, 1981.
- [Kas] M. Kashiwara, *On crystal bases*, Representations of groups (Banff, AB, 1994), 155–197, CMS Conf.Proc., **16**, Amer.Math.Soc., Providence, RI, 1995.
- [KL1] M. Khovanov and A. Lauda, *A diagrammatic approach to categorification of quantum groups. I.*, Represent.Theory **13** (2009), 309–347.
- [KL2] M. Khovanov and A. Lauda, *A diagrammatic approach to categorification of quantum groups II.*, Trans.Amer.Math.Soc. **363** (2011), 2685–2700.
- [KOR] B. Külshammer, J. Olsson and G. Robinson, *Generalized blocks for symmetric groups*, Invent.Math. **151** (2003), 513–552.
- [LLT] A. Lascoux, B. Leclerc and J-Y. Thibon, *Hecke algebras at roots of unity and crystal bases of quantum affine algebras*, Comm.Math.Phys. **181** (1996), 205–263.
- [Lus] G. Lusztig, *Introduction to quantum groups*, Reprint of the 1994 edition. Modern Birkhäuser Classics. Birkhäuser/Springer, New York, 2010.
- [Lus2] G. Lusztig, *Finite dimensional Hopf algebras arising from quantized universal enveloping algebras*, J.Amer.Math.Soc. **3** (1990), 257–296.
- [Mac] I.G. Macdonald, *Symmetric functions and Hall polynomials*, Second edition. Oxford Mathematical Monographs. Oxford University Press, 1995.
- [Nak] T. Nakayama, *On some modular properties of irreducible representations of a symmetric group. I*, Jap.J.Math. **18** (1941), 89–108.
- [Osi] M. Osima, *On the representations of the generalized symmetric group*, Math.J.Okayama Univ. textbf4 (1954), 39–56.
- [Rou] R. Rouquier, *2-Kac-Moody algebras*, arXiv:0812.5023
- [Tsu] S. Tsuchioka, *Graded Cartan determinants of the symmetric groups*, to appear in Transactions of the American Mathematical Society
- [Tsu2] 土岡俊介, 圏論の歩き方第 14 回 ~ 表現論と圏論化 ~, 数学セミナー 2012 年 9 月号, 78–84
- [UY] K. Uno and H-F. Yamada, *Elementary divisors of Cartan matrices for symmetric groups*, J.Math.Soc.Japan **58** (2006), 1031–1036.